

岸本葉子×中川恵一

日常の中の がん

最終回の話は、死生観について、です。

下 がんを教育に

中川 命に限りがあることを

考えさせるといふ意味では、がんもそんなに悪くないし、逆に幼少期からがんに対して教育することも意味があると思うんです。小学生から英語を教えるようになっていきますけれど、岸本さんのように仕事で英語を使いこなす必要のある日本人がどれだけいるか。
岸本 いえいえ、私は英語は苦手で、必要な時は通訳をお

願います。

中川 またまたご謙遜を。英語を使う比率とがんになる比率とを考えたら、がんのことを教えるべきだと思いますか。渡海文部科学大臣に会った時にも、そう言ったんですけれど、コイツは一体何を言うんだという顔をされました。縁起でもないし、先生が教えられないからダメだ、と。
岸本 母校で高校生相手に講

中川恵一

なかがわ・けいいち●1960年、東京都生まれ。東京大学卒業。同医学部附属病院緩和ケア診療部部長。毎日新聞朝刊にて『Dr.中川のがんを知る』を連載中。近著に『がんのひみつ』（朝日出版社）。

岸本葉子

きしもと・ようこ●1961年、神奈川県生まれ。東京大学卒業。保険会社に勤務した後、北京外国語学院に留学。旅や生活にまつわるエッセイストとして活動する。近著に『岸本葉子の根菜ごはんのすすめ』（昭文社）。



演されたんですね。反応はいかがでしたか。

中川 すごく良かったです。

岸本 違和感とかミスマッチとかは。

中川 たしかに心配していたんですけど、とても反応が良かったです。教師も目から鱗だと言ってくれていて、こういうことに関しては教師も生徒も同じレベルです。高2で十分想いを致すことができるのに、引き出す教育ができていないのではないかと思います。がんになった時のためというより、命に限りあるという大事実に気づききっかけですよ。有限の生だからこそ、苦悩があるし、一人ひとりの物語にも尊さがある。その感覚が、結果的にいじめや自殺の問題解決にも、つながってくるんだと思うんですよ。

岸本 岸本さん、玄侑宗久さんと往復書簡してましたよね。

岸本 結局、それで心の安定を得たというよりも、瞬間瞬

間を生きましようということでしたね。

中川 仏教的時間は曼荼羅、物理学的にいうところのフラクタルですよ。一瞬と永遠の差はどこにあるのか、ということ。そういうことを考えることが、死を受け入れることにつながるでしょう。でも日本人は、宗教感がなくなつて死にづらくなっていると思うのです。

治療の意味とは

中川 これから安楽死の議論が高まってくるだろうと思います。日本には、宗教がないから一直線にそこまで行きそうです。後期高齢者医療制度で、生前に延命治療しないリビングウィルを取っておくと、病院が診療報酬を取れるようになりまし。すいぶん批判にさらされましたし、経済的誘導で取りのせしモニーを変えるのはいかがでしょうか。けれど、事前に意思表示

有限の生だからこそ一人ひとりの物語が尊い。そう気づかせるがん。(中川)

しておくのは悪くないと思います。

がんの悪液質というのがあって、栄養を取られて痩せていく。僕ががんになって軽口を叩けないくらいになったら、安楽死を要望すると思うんです。そういう文化があつてもいいと思います。がんには、死を計画的にコントロールできる部分もあります。

岸本 ある程度残り時間が分かるというのは、大きく考えれば悪くないのかな、とは思いますが。でも実際に余命告知を受けたことがないわけで、その身になれば難しいかもしれないと思います。私のがんとを発見してくれた医師もご自身55歳でがんが見つかつて、死ぬとしたら、がんがいいな

と思つたそうです。それから15年経って肝臓がんが見つかつて、最初は無治療で行こうかと思つたけれど何もしないで死に向かつていくことに耐えられるだろうか考え直して、治療だけはすることにした、と仰つてました。

意味のない治療と一口に言いますが、医学的には意味がなくても、医学的じゃないところで、ある人にはすごく意味があり、別の人には意味がないということはあります。

中川 厳しい状況にあることは、医療者が思う以上に、本人は分かっていると思うのです。たしかに意味は一つじゃありません。ほとんど効果のないようなことに大金を使う

人もいて、医師はなんでそんなことと思つているのですけれど、人によっては、お金を使うことそのものが意味を持つ場合もあるかもしれない。最終的に納得できる感覚を求めている。求めているのは、evidenceではありませんよね。

岸本 できるだけのことはした、ということが納得感につながるのでしょうか。それからお年寄りでもなく死ぬ方と話していると、あの世で誰かに会うと言いますね。それが救いになるし、自分だけの納得感にもなっているのかもしれないと思います。

中川 東大病院で、がん患者さんに死生観のアンケートをお願いしているんです。

真剣になりそうです。中川 偉い先生方にはものすごい不評なんです。患者さんがかわいそうだって。でも、たぶんこういうことを考えて整理したい人も多いはずなんです。

岸本 わりと患者さん、準備というか、ちゃんと考えることが好きな人は多いです。沢庵和尚とか親鸞とかネイティブアメリカンの死生観とか、たくさん読んでノート取つたりしていた勉強家の人が出て、いろいろ話をしていたんです。でも亡くなる前1週間くらいは話ができなかったのか、その時何を思つていたのか、どんなことを考えたのか本当に話をしたかったです。

中川 私はがんになったこと

がないので、岸本さんの方が人間として格上だと思つていきます。死を皮膚感覚で捉えたことがあるはずだからです。現代の日本にがんがなかったら、不快感が広がって大変なことになると思います。

岸本 がんの経験のない人は、経験した人が自分と違う感覚を持つていると思つているかもしれませんけれど、がんを経験した人でも、そこは様々です。私も、再発した人に対して不思議な負い目のようなものを感じています。私が言うことも再発を経験した人からすると、それは違うよ、ということがあるんじゃないかと、いつも葛藤があるんです。

中川 常に連続していていくだけでも微分できる。

岸本 そう、いくらでも細分化できるんです。再発にしても70歳台と40歳台では、考えることは違うはずですよ。

中川 でも死に向かつて歩いている部分では共通でしょう。それを認めないのはまずいん

じゃないか、と思います。縁起でもないことを言うと、岸本さんは再発したとしても、ちぢれ麺の手打ちパスタを食べに行くはずと思うんです。

岸本 たしかに、そんな気がします。聖俗いっしょくたに人の生活はあるつてことでしょうか。今日は何を食べようかと考えている一方で、鈴木大拙を読んで、どうしたら再発しても心の動揺が少なくて済むだろうというようなことを考えてもいます。この辺は、経験してみないと実感できないことかもしれない。

読者の中には、それまで楽しい日常エッセイを書いていたのに、なぜ「がん」なの、と違和感を伝えてくる人もいます。でも、がんでも、楽しくあつていけないことないですよ。みんな手軽に感動したいから、がんだったら感動的でないといけないというか、泣ける素材として安直に使われてしまつているのを感じます。

聖俗いっしょくたが人。がんであつても楽しくて構わない。(岸本)